

論文

# 幼児期の自閉スペクトラム症児及び家族への支援のあり方 —早期支援プログラムAPPLEの実践をもとに—

藤田 久美<sup>1</sup>

KUMI Fujita

永瀬 開<sup>1</sup>

NAGASE Kai

小田 真実<sup>1</sup>

ODA Mami

井辺和杜<sup>2</sup>

IMBE Kazuto

<sup>1</sup> 山口県立大学社会福祉学部 <sup>2</sup> 広島文教大学教育学部

## 要 旨

近年、就学前の自閉スペクトラム症（ASD）児に対する早期支援が社会的に注目されている。本研究では、就学前のASD児を対象とした早期支援プログラムであるAPPLEを1名のASD児に対して実施した結果を報告する。本プログラムを実施した結果、対象児の共同注意行動及び、言語行動が豊かになっていく様子が確認された。加えて、対象児の母親において、子ども理解を深めている様子もみとめられた。今後は、対象児を増やした上でAPPLEの支援効果を検証していくことが必要である。

キーワード：自閉スペクトラム症 早期支援 APPLE 共同注意 言語行動

## 1 自閉スペクトラム症の早期支援

自閉スペクトラム症（Autism spectrum disorder: 以下、ASD）とは、社会的コミュニケーションと対人相互反応の質的障害及び、興味の限局と反復的行動パターンを特徴とする神経発達障害である（American Psychiatric Association, 2013）。ASD児は発達の早期から叙述の指差しをはじめとする社会的な行動が見られにくいということが指摘されている（Dawson, 2007）。加えて、Dawson（2007）はASD児における社会的コミュニケーションの特徴が、社会相互作用における子ども同士の能動的な関わりを減少させることを指摘している。こうしたことから、近年、ASD幼児の社会的コミュニケーションに対する早期支援プログラムの開発が求められている（横山ら, 2019）。

これまでASD幼児に対する早期支援プログラムとしては、JASPERをはじめとするいくつかの方法論が提案されている（Kasari et al., 2006）。それらのプログラムは子どもの自発的な遊びを通して、子どもの社会性を育てていくというものである。これらの支援プログラムの効果については様々な介入研究を通して確認されており（Waddington et al., 2021）、我が国の児童発達支援センターをはじめとする支援機関でも導入されている（浜田, 2018）。その一方で、これらの支援プログラムは子どもの社会性や情動調整を育むことに焦点が当てられているため、ASD児を育てる親の育児に対する見通しの持てなさや、不安、ストレスについては特に支援方法を提供していない。子どもは日常生活の多くを支援

機関だけでなく家庭において過ごしているため、ASD 幼児の QOL の向上といった側面から考えると、ASD 幼児のみならず、ASD 幼児を養育する家族に対しても同時に支援を提供するようなプログラムが望ましいと考えられる。

ASD 幼児に対する早期支援プログラムのなかで、ASD 幼児と家族を包括的に支援する枠組みとして知られているのは FITT (Family Implemented TEACCH for Toddlers) である。FITT は、ASD 幼児と関わっていくために、家族が協力し合う親教育・支援モデルであり、ASD 幼児の社会的スキルの伸長だけでなく、育児ストレスの軽減にも効果的であることが示唆されている (松田ら, 2018)。ASD 幼児と家族に包括的な支援を提供できるという点で FITT の枠組みは重要な示唆を与えるものの、FITT には習熟した支援者が 24 回の家庭訪問を行う必要があることから、支援機関において普及させていくのに困難があると考えられる。こうした背景の中、筆者らは ASD 幼児とその家族を対象としたより簡便に実施できる早期支援プログラムを開発した。

## 2 自閉スペクトラム症の子どもと親を対象とした早期支援プログラム APPLE の開発

### 1) 山口県立大学社会福祉学部附属子ども家庭ソーシャルワーク教育研究所の取組

令和 5 年 4 月に開所した山口県立大学社会福祉学部附属子ども家庭ソーシャルワーク教育研究所 (以下: 研究所) では、子ども家庭福祉に携わる支援者の専門性向上に資する研究や地域課題解決のためのプログラムの開発を行っている。研究所で実施した山口県内の保育現場への調査より、保育所・幼稚園等に在籍する ASD 幼児の保育を行う保育士・幼稚園教諭が、その保育方法や親への支援に困難を抱えていることが明らかになった。こうしたことから、研究所において就学前の ASD 児とその親を対象とした早期支援プログラムを開発することとした。

### 2) 研究の全体構想

本研究の目的は ASD 幼児の診断後に実施する早期支援プログラムを開発し、ASD の診断を有する子どもとその家族への支援実践を行うことである。研究への協力が得られた ASD の診断を受けた子どもとその保護者を対象に、APPLE を実施した結果をもとに ASD 幼児とその保護者への早期支援のあり方を検討した。特に、人とのかかわりや社会的遊びをつくりだす支援を行うことで ASD 児の人とのかかわりの様相の変化に着目して検討する。同時に、ASD 児とその母親への支援を並行して行うことの有効性について考察した。その上で、早期支援プログラムの有効性や実現可能性について提案するとともに課題について明らかにする予定である。また、支援実践過程から得られた知見を日常的・継続的に支援を行う児童発達支援センターや保育現場に還元することを最終ゴールとした。

### 3) ASD 幼児と家庭に対する支援プログラムの開発

冒頭に記した課題を踏まえ、第一著者がこれまで実証的研究として取り組んできた ASD 幼児への支援プログラム (藤田, 2001) 及び、ASD の障害特性が認められる幼児の発達支援と養育者への面接を並行して行うプログラム (藤田ら, 2021) をもとに、著者らが所属する研究所で実施するプログラムを企画し、その有効性や実施可能性について検討することとした。このプログラムを「APPLE (Children with Autism, Play and social development, Parental support, Learning from children, Early Support)」と命名した。

#### 4) 早期支援プログラム APPLE について

##### ① APPLE の支援コンセプト

APPLE (Children with Autism, Play and social development, Parental support, Learning from children, Early Support) は、発達初期にある ASD 幼児とその保護者を対象としたプログラムである。表 1 に APPLE の構成要素と各構成要素の概要についてまとめた。

表 1 APPLE の構成要素と各要素の概要 (藤田ら, 2023)

APPLE の 5 要素	各要素の概要
I : Children with Autism	自閉スペクトラム症の診断を有する子どもの育ちを支えるための支援プログラムであること
II : Play and social development	子どもの好きな遊びによりそいながら、人とのかかわりや社会性を育むためのかかわりを行っていくこと
III : Parental support	子どもを育てる親と共に子どもの理解を共有しながら、支援者が親への子育て支援と子育てへの助言を行っていくこと
IV : Learning from children	子どもへのかかわりを通して、子どもの姿に学びながら、社会的な遊びをつくりあげるかかわりを行っていくこと
V : Early Support	自閉スペクトラム症の診断後、できるだけ早い時期から、人とのかかわりや社会的遊びをつくりだすかかわりを育てることの必要性を明らかにすること

##### ② APPLE の子どもへのかかわりの方針

APPLE における子どもへのかかわりの方針としては、子どもの遊びに寄り添いながら、子どもの言動に寄り添い、応答的環境を整える関わりと、人とのかかわりや社会的遊びをつくりだすことを目的とした意図的な関わりを行う。その上で、特に人とのかかわりや社会的遊びをつくりだすための意図的な関わりとして、1対1のかかわりにおける「二項関係」及び、「三項関係」をつくる支援を行う。「二項関係」及び、「三項関係」の成立に欠かすことができない、子どもが興味を示す玩具については、保護者や子どもが通う保育所から情報を得る。

##### ③ APPLE における家族へのかかわりの方針

APPLE では、子どもとの関わりと並行して母親との面接も実施する。具体的には、子どもとかかわりを行う同じプレイルーム内に面接用の机と椅子を設置した上で、母親と斜向かいの位置関係に面接者が座り、面接を行う。初回のインテーク面接では、子どもの生育歴を聴取した後、KIDS 乳幼児発達スケール (三宅, 1991) と M-CHAT 乳幼児期自閉症チェックリスト (Robins et al., 2001; Inada et al., 2011) といったアセスメントを実施する。2回目以降は、子どもの近況報告を聴取した後、SCERTS で用いられる SAP-R (Prizant et al., 2003) を参考に半構造化面接を実施する。面接の間には、適宜、第一著者と子どもとかかわりについて、かかわりの意図や ASD 児の行動の背景にある心理、社会性の発達や言語発達について解説する。また、面接においては母親の子育てに関する悩みや不安を傾聴し、母親の質問に応答しながら、子育てに対する助言も適宜行う。

#### ④支援の評価・検討方法

APPLE の評価は、子どもとの関わりの様子を記録したビデオ録画に基づいて行う。具体的には、ビデオ録画の中で、子どもの他者に対する注意が見られた場面や他者との共同注意が見られた場面、子どもの発話が見られた場面といった、子どもの社会的コミュニケーションと関連する場面に関するエピソード記述を作成する。そして、それぞれのエピソード記述について、子どもの支援者間で共有し、子どもの発達や支援の効果について確認する。その際に、母親との面談において得られた子どもの日常生活における社会的コミュニケーションの様子も参考にする。

### 3 研究の目的と方法

#### 1) 研究の目的

本研究では、2歳0カ月でASDの診断を受けた男児A（以下、A）とその保護者を対象に、1年10カ月間にわたって行なったAPPLEの実践をもとに、発達初期にある自閉スペクトラム症とその保護者への早期支援のあり方を検討することを目的とする。特に、人とのかかわりや社会的遊びをつくりだす支援を行うことでASD児の人とのかかわりの様相の変化に着目して検討する。同時に、Aの母親への支援を並行して行うことの有効性について考察する。その上で、APPLEの有効性や実現可能性について提案するとともに課題について考察する。

#### 2) 方法

##### ①対象者

2歳0カ月で自閉スペクトラム症の診断を受けたAとその母親が対象であった。2歳2ヶ月時の初回セッション時に行なったKIDS乳幼児発達スケールの結果は、総合発達年齢1歳8ヶ月であり、表出言語1歳0ヶ月、対子ども社会性1歳2ヶ月であった（発達指数77）。乳幼児期自閉症チェックリストM-CHATの結果は不通過項目が8項目であり、目安となる3項目を大幅に上回っていた。

##### ②APPLEにおける子どもへの関わり及び家族への関わり

子どもとの関わりは、医療現場でASD幼児への個別療育の経験のある第一著者が行った。母親との面接は、発達心理学を専門とし、発達障害児支援の臨床経験を有する第二著者が実施した。先に述べたAPPLEの方針をもとに、子どもと家族の実態にあわせて柔軟的に行った。対象の子どもAと母親への支援期間は、令和5年5月～令和6年11月（Aが2歳2ヶ月～3歳8ヶ月）までで計8回で実施した。支援の流れは、①Aと母親が入室をする。②Aと第一著者がプレイルームで一緒に過ごす。その間、母親と第二著者は同室で面談する。③面談コーナーで支援者と母親と一緒にお茶とおやつを食べる。④さようならのあいさつ、である。所要時間は1時間としている。

##### ③発達アセスメントと記録及び分析

Aの発達アセスメントは、APPLEにおけるAとの関わり、保護者との面接、Aが利用する保育園での訪問によって行った。APPLEにおける支援者とAの関わりの様子はビデオ撮影を行い、子どもの様子についてエピソード記述を作成した。それらをもとに子どもの人とのかかわりや社会的遊びへの支援方法のあり方について検討した。また、Aが利用している保育所に5回、参与観察と保育士からの聴き取りを行い、Aの興味のある遊びや活動やAが保育士や同年齢の子どもとどのようなかかわりを行っているか把握した。また、保護者からも、Aの家庭での様子を聴き取り、好きな遊びや活動、苦手な

遊びや活動、家族（父、母、祖父母、姉）とのかかわりの様子を把握した。また、研究所で行う他の事業（わらべうたを導入した親子関係支援プログラム）への参加した際に、Aと母親の様子を把握した。APPLEの実践と並行して、Aの実態を把握したり、母親からAの様子を聴いたりしながら、包括的なアセスメントを行った。

#### ④倫理的配慮

本実践の開始以前に、セッション中の録画データ、セッションの内容に関する記録、心理検査の結果等を研究データとして収集・使用すること、およびそれらに関連する学会発表や論文投稿を予定していることを説明し、Aの保護者から書面にて同意を得た。

## 4 結果と考察

令和5年5月～令和6年11月までの1年6か月間、8回のAPPLEの実践における支援者との遊び場面におけるエピソード記述をもとに回ごとにまとめて考察を行っていく。Aの人とのかかわり、共同注意行動及び言語行動に着目して考察する。加えて、面談時の母親とのやりとりや早期支援プログラムを母親と並行して行うことの効果について考察を行っていく。以下、各セッションにおけるエピソードの概要とその考察を示した。なお、エピソードの概要は点線の枠内に示した。

### 【#1（2歳2ヶ月）】

Aはプレイルームに準備していた玩具を自分で選んで遊ぶ。支援者はその遊びを保証しながら関わった。Aが興味をもつもの（小さな玉、玉を落として遊ぶ玩具等）と一緒に見ながら、そばで見守っていたが、Aの視線は玩具やものに向け、支援者の顔を見ることはなかった。支援者が、一緒に遊ぼうと介入をすると、その働きかけに反応する場面はほとんどなかった。しかしながら、Aが好きな遊びをしている時や、うまくいかないなど困った様子が見られた時、支援者がサポートをすることは受け入れてくれた。Aが小さな玉をころがしては走って取りに行く行動を繰り返していた時に、遠くに飛んだ玉を支援者がとってAにわたすと受け取ってくれた。Aは支援者の顔を見たり、視線を合わせたりすることは一度もなかった。また、Aの発語はほぼ認められなかったが、プレイルームで自由に遊ぶAの目は輝いていて、好きなおもちゃや物とかかわることで、Aの情緒が安定しているように見えた。

このエピソードでは、好きなおもちゃや活動で遊ぶことのできるAの様子が見られた。大学のプレイルームははじめて来た場所であったが、Aは自分でおもちゃなどを選択し、遊ぶことができた。また、この日、支援者と遊ぶこともはじめてであったが、支援者がAの遊びを見守り、Aの遊びがスムーズにいくようサポートしたことに拒否することもなく、自然に受け入れている様子があった。Aのこのような様子は、はじめて出会う他者や場所に対する心理的な抵抗感の少なさを表している。その一方で、Aの視線や関心は強く<もの>に向けられ、支援者と視線を合わすことは1度もなく、言葉も発することはなかった。このような様子はAの他者に対する関心の低さを表していると言えるだろう。

Aが活動中に遊びの活動に従事していた様子から、Aにとって好きな遊びに夢中になって従事することは、認知、微細運動、粗大運動等の発達を促すだけでなく、情緒的な安定にも繋がっていることが考えられた。こうしたことから、Aが夢中になれる遊びを尊重しながら、Aの社会性の発達を促進していく意図的なかかわりをしていくことが重要であることが確認された。

## 【#2 (2歳4ヶ月)】

この日は、Aが好きな遊びに夢中になることや、Aのやりたいことを尊重し、寄り添うことを基本にしながら、支援者とAがやりとりできる場面をつくる関わりを意図的にもつようにはじめてみた。玉を投げては、走って追いかけていく遊びにしばらくつきあった後、Aに玉を入れ物の中に入れるように支援者が見本を見せて「ここに入れて」と玉をわたすと入れ物に入れることができた。Aは支援者から褒められるとよい表情をして走りまわった。シャボン玉セットをAに見せて、「一緒に遊ぼう」と言って支援者がシャボン玉を吹くと、「わあ」と声を出してかけよってきた。Aに吹かせようとストローをわたすが、Aはストローを支援者の口に加えさせ、「やって」というような表情で支援者の顔を見る。支援者がシャボン玉を吹くと、Aはシャボン玉に顔をよせて笑顔になる。支援者は、こうしたAの要求に応えつつ、Aとの遊びを支援者自身も楽しみながらAにかかわると、Aは声を出して笑った。さらに、机について取り組む活動では、丸と三角と四角の型はめや、プットイン（玉を穴に入れる課題）をすることができた。

母親から、Aが「形」が好きだという話を聞いていたため、形がはっきりわかる課題を準備したところ、スムーズにはめることができた。Aは、支援者に褒められ、同じ部屋にいた母親にも褒められ、得意そうな表情をした。お絵描きセットを出すと、自分で色を選んで、クレヨンを上手にもって真剣なまなざしで線を描いたり、ぐるぐるとまるく線を描くことができた。この日のAは、支援者が、「くろでぐるぐる描いたねー」の声に反応して、「くろー」といったり、自分から「あかー」と自発的に言葉を発する様子も見られた。



#2では、事前に母親から聞いておいたAの好きな遊びや活動を取り入れて、支援者とのやりとりが生まれるような働きかけを行った。Aは支援者の要求(容器に玉を入れてほしい)、支援者から提案する遊び(シャボン玉、型はめ遊び、お絵描き等)に応じた。このような場面では、Aと支援者との間に好きな玩具に対する共同注意が成立していたといえるだろう。また、褒められたことによってAが楽しそうな表情をした時は、支援者も一緒に笑顔になるといった、Aを賞賛し、Aと共に感情を共有できる場面をつくることで、Aの表情が豊かになっているように思われた。また、お絵描きの場面では、Aが思う存分に線やなぐり描きができる環境を準備し、支援者が見守りながら、声かけや一緒に線を描く活動をしたところ、Aが言葉を発した。このようにAの好きな活動を尊重することを基盤としつつ、その活動に即した声かけがAの言語活動を活発にするのではないかとことも考えられた。活動中のAの視線は、ほとんど玩具や物に向かっていたが、上述したエピソードのように「A—玩具—支援者」といった三項関係の中で共同注意が成立し、他者と共にいることを意識した行動がみられたことから、Aの社会性の発達が芽生えていると考えられた。

## 【#3 (2歳6か月)】

この日のAも好きな遊びを思い思いにしたり、支援者に要求に応じてもらったりして満足な表情を浮かべていた。支援者がAとのやりとりが生まれるように、Aの好きな遊びを介してかかると、目を輝かせたり、驚いたような表情をしたり、視線を合わせたりすることもあった。シャボン玉やお絵描き等のAの好きな遊びを介することで、支援者の顔を見る頻度も増えたように思われた。Aがやっている行動を支援者が模倣しながらかかると、Aは支援者の方をじっと見て不思議そうな表情をした。お絵描き場面では、「くろ」「あか」「きいろ」「みどり」など、Aが最近覚えた色の名前を自発的に発する場面が見られた。また、支援者が「どんな色が好き?」「あか!」と答えた後、保育所で歌っている歌を繰り返す場面もあった。さらに、「しかく」「まる」「だえん」など、好きな形の名前を言葉にして発してくれた。この時、まるでそばにいる支援者に教えてくれているような表情だったように思われた。

このエピソードでは、Aが支援者と視線を合わせる様子がみられた。Aの視線が支援者や母親に向けられることが何度かあり、他者への関心が高まっている様子がうかがわれた。支援者がAの要求していることと違う反応をしたとき、不思議そうな表情をして支援者を見て、支援者の反応を確かめるような行動ははじめて見られた。色の名前や形の名前を言う時、支援者に伝えているように感じる場面が何度もあった。このように自己の振る舞いによって他者がどのような反応をするのかをうかがう様子が見られた。

#### 【#4 (2歳8か月)】

この日も、前回までと同様にAの好きな遊びや活動を尊重しながら、Aとのやりとりが生まれるような働きかけを行った。支援者が、「ここに玉を入れて」や「この課題をやってみよう」等をAにお願いすると、その要求に応える様子も見られた。Aは支援者に褒められると、嬉しそうな表情を浮かべた。Aの好きなものが入っている透明な容器を支援者に蓋をあけてほしいと、Aが要求した場面も見られた。この場面では、支援者が「あけて？」と言葉を促すと、Aは「あけて」と、はっきり言う様子が見られた。Aの「あけて」の言葉にすぐに応答して、支援者が蓋をあけたところ、Aが容器の中の玉を手にして嬉しそうな表情をする姿がみられた。支援者からAに玩具を「ちょうだい」という声はないが、全身で「いやだよ」という表現をする様子が見られた。プレイマットの遊びの時間終了後、支援者と母親とAがおやつを一緒に食べる場面で、支援者や母親と面接をしていた別の支援者が、Aに「(おやつを)ちょうだい」と手を出してお願いすると、「いやだよ」といわんばかりに手をはらいのけた。支援者らが、何度か、「ちょうだいよー」と言って手をさしのべるが、やはり手をはらいのける。支援者らが手をはらいのけられ「えー？くれないの？」と悔しそうな顔をすると笑顔になる。そのやりとりを何度も繰り返すと声を立てて笑うA。そして「楽しいね」といわんばかりの表情で母の顔を見る場面が認められた。



このエピソードにおいては、得意な型はめができた時や支援者の要求に応えた際、他者からの賞賛に嬉しい表情をするようになった姿が認められた。このような振る舞いは、より他者を意識した行動であるとともに、他者との相互的なやりとりをポジティブなものとして捉えるようになったことを示唆している。支援者のことを自身の欲求を満たしてくれる存在である、あるいは自身の要求に応じてくれる存在であるとAがみなしているため、スムーズな「あけて」の模倣につながったのではないかと考えられる。

さらに、おやつタイムでは、こうした支援者とのやりとり(ちょうだい-いやだ)の活動を繰り返し楽しむ表情が見られ、そのことを母親へ視線を向けて伝えることができた。このことは、複数の支援者とAとの間におやつを介した共同注意が成立したというだけでなく、その楽しいやりとりを母親と分かち合いたいという叙述的な機能を持った共同注意であったと考えられる。ASD児において叙述的な指差しが見られにくいということは明らかにされているが(Dawson, 2007)、母親との間の愛着関係や支援者との間のポジティブな関係性が成立している場合、叙述的な共同注意の成立が芽生える可能性を示唆している。

【#5 (2歳10ヶ月)】

このセッションでも、好きな遊びを一人で楽しむ姿、支援者に要求を受け入れてもらう姿、支援者から提案した遊びと一緒に取りくむ姿が見られた。シャボン玉遊びでは、支援者とのやりとりを楽しんでいるような表情が見られたり、「あれー？」と声を出したりする場面もあった。〈はらぺこあおむし〉の大型絵本を自らプレイマットの上に運んできたAは、あおむしの人形を食べ物の中に入れる遊びを楽しそうにしている。その際、支援者が食べ物の名前を言うと、Aは、それにあわせるように絵本中の食べ物の中に開けられた穴の中にあおむしの人形を入れる。Aが手の届かない棚の中の選ぶとき支援者が指さして「これ？」という「これー」と高い声で答える。Aがプレイマットで遊んでいる際、支援者が「かきかきする人？」と言いながらお絵描きセットを準備すると、かけよってくる。「すわってください」という「すわって」と言い、自分から椅子に座ってお絵描きを始める。その後、型はめ遊びをするA。「できたー」と支援者がいうと誇らしげな顔になって、集中して取り組むA。車の型はめをするとき、消防車をみつめて「しょうぼうしゃ」と大きな声で言う。「しょうぼうしゃだね」と支援者が応えともう一度「しょうぼうしゃー」とさらに大きな声を出して、マットの上に置く。続けて、「タクシー」と声を出して、支援者を見る。支援者が「タクシー」というとマットの上にタクシーの型を並べる。また、オレンジ色の型はめを型にはめた時、「オレンジー」と大きい声をだして、母親のところにもその型はめを持っていく。数字の型はめ遊びにおいても、「いちー」「さん」「よん」「じゅー」等、言葉を発しながら型をはめていくA。支援者が、Aに合わせて数字を言ったり、Aがはめた型を指さしながら、数字を言ったりすると笑顔になる。

【#6 (3歳0か月)】

この日は外がとても暑かったので、プレイマットで遊ぶ前に母親とAに飲み物を準備していた。Aは、テーブルの上に準備していたぶどうの絵が描かれたジュースをみて、「ぶどう」「ぶどう」と何度も言う。「ぶどうジュースのむの？」と支援者が聞くと、「ぶどうジュース」と言って、椅子に座ってぶどうジュースを飲む。その後、プレイマットに行き、ままごとのぶどうのおもちゃを手にとって「ぶどう」「ぶどう」と言いながら嬉しそうにかけまわる。支援者が、おままごととセットのかごととAの前に持ってくるとりんごやバナナなどの食べ物をとりながら、かごに片付ける。支援者がおさらを置いたら、そのおさらとぶどうを持って笑顔でマットをかけまわる。

お絵描き場面では「あか」「みどり」という。まるで支援者に教えてくれているような語り口のようなようだった。「教えてくれたのね」と支援者がAに語りかけると、また、「あおー」「あかー」「ピンク」「だいたい」等と色の名前をはりきって言う。その後、「むらさき」のペンを支援者にわたして、じっと支援者の顔を見たので、支援者が画用紙にそのペンで描いてみる。それから支援者にペンをわたして描いてもらうという遊びを繰り返した。Aは、何度も支援者の顔を見て視線を合わせ、「描いてほしい」という気持ちを、ペンをわたすという行動と視線で伝えてくれたようだ。

車の型はめ遊びでは、支援者がAに型をわたすとき、Aの視線に入るよう「ププー」と言いながら車を走らせる真似をした。Aは、にっこり笑いながら型をとり、はめる。その遊びを繰り返しながら、型はめ遊びをしていたが、Aが、車の型を手に取り、机の上を走らせたので、支援者が「ププー」「走る、走る」というと満面の笑みになる。

これらのエピソードが見られた時期になると、言語活動は活発化し、色や形の名前だけでなく「あれー」「これー」といった言葉が、支援者とのやりとりを通して生まれてきた。また、「しょうぼうしゃ」「タクシー」といった乗り物の言葉、「ぶどう」等の言葉が、玩具を見て言うことができるようになった。これらの発語があった際、Aは支援者の顔を見る行動を示しており、支援者のAやAの遊びに対するポジティブな関心がAの言語活動を支えていることがうかがわれた。先行研究において共同注意の成立が言語活動を促すことが明らかにされているが (Bottema-Beutel, 2016)、このエピソードはこの知見

をエピソードによって示したものといえるだろう。さらに、支援者がAに働きかける行動を、Aはよく見ていて、支援者の働きかけに応じる姿は、他者と一緒に遊んでいるように思えた。支援者が、車を走らせるふりをすると、少し後に支援者の前で同じようにその車を自分も真似して遊ぶという場面も見られたことから、Aの他者に対する関心を高めることは模倣や言語活動の促進につながることも考えられた。

### 【#7 (3歳6ヶ月)】

Aはいつものようにプレイルームで好きな遊びや活動を支援者のかかわりに適宜反応しながら楽しそうな表情で行う。机で行う活動ではAの好きな絵本<はらぺこあおむし>の型はめを準備し、支援者が一緒にやろうと働きかけると、型はめ遊びをはりきってする。はらぺこあおむしを手にもって「あおむしー」と言う。「あおむしだねー」と答えると支援者の顔を見て満足そうな表情をする。絵描きでは、色の名前を言いながら、クレヨンをもって描く。支援者はAの言動に应答していると、Aから「きみどり」と言って、支援者に黄緑のクレヨンを手わたした。支援者は、そのクレヨンを使って紙に「きみどりー」と言いながらぐるぐると描いてみたところ、Aはきょとんとした表情で支援者を見る。同じフロアにいた母親から、「先生、Aは「きみどり」と文字を書いてほしいのかも？」とアドバイスを受ける。支援者が、紙に<きみどり>と文字を書く満足そうな表情をする。

型はめ遊びでは、支援者が型をわたすとき、型を片手に握って「どっちだ？」というと、興味深そうな表情。Aが手を伸ばしたとき、「こっちー」と支援者が言いながら型を見せると笑顔で型をとる。この遊びを繰り返し行くと、Aは「こっちー」と自分から声を出した。Aはプレイコーナーで支援者の働きかけに应答し、何度も視線が合う場面がみられた。机について行う活動では頻繁な言語活動が認められた。また、一緒にいる他者に要求を伝えることがとても上手になっている姿があった。また、自分の要求することと異なる行動をした他者に対して意志を伝えるような姿が見られた。



Aはプレイマットで支援者の働きかけに应答する時、何度も視線が合う場面がみられた。机について行う活動では頻繁な言語活動が認められたが、このセッションでは、特に、Aの表情が豊かになったことが認められた。エピソードにあるように、自分の要求（「きみどりという字を描いてほしい」）が伝わらないという思いを困惑した顔で訴え、支援者が母親に助言を受け、Aが支援者にやってほしかった思いをわかってもらえたことの嬉しさを表情で表現する場面が見られた。ASD児においては、その表情の乏しさから、他者に自身の感情を分かってもらえる経験が希薄であるということが指摘されている(菊池・古賀, 2001)。このような他者に自身の要求を理解してもらえた経験は他者に対する信頼感を醸成することにつながると考えられる。母親との面接からも、家でも、父親や母親とのやりとりを通して、こうした場面が多くみられるようになったということが語られた。家庭では、もっと頻繁に母親に様々な要求をしていくということであった。母親はAがこうしたかかわりができるようになったことを心から喜び、Aとのかかわりを楽しんでいるような様子だった。Aが身近な大人との具体的なかかわりの経験の中で、確実に社会性の発達が促されていると考えられた。

【# 8 (3歳8か月)】

プレイルームで遊ぶAに支援者が「お絵描きする？」と聴くと、「いや」「はらぺこあおむし」とはっきり答える。〈はらぺこあおむし〉の絵本を出すと、あおむしの人形を手に取り、生き生きとした表情で絵本をみる。支援者はAの前に座り、Aが開いたページを一緒に見た。食べ物ページになると、穴にあおむしを通す遊びを支援者とする。これまでも何度か、大型絵本で遊んできたが、この日は、絵本にでてくる食べ物の名前をすべて言う。Aは支援者がいることを意識しながら言葉を発しているようにも見えた。また、いつもの遊び（玉や車をころがす遊び、型はめをする遊び、シャボン玉等）においても、支援者からのかかわりに応じたり、視線を合わせたりするだけでなく、支援者の言葉がけに反応した声を出していた。また、支援者に自分から要求をするときも、顔を見て表情豊かに「やりたい」という意思を伝えてくれていたようだった。Aが、道路の絵本を開いて、その絵本についている小さな車を走らせて遊んでいるとき、支援者も、車のおもちゃを持ってきて走らせると、ちらっと支援者を見て、続けて車を走らせていた。その後、Aは自分の手に持てるくらいのトラックのおもちゃを棚から取って、プレイマットの上を走らせた。その範囲はどんどん広がって、今度は自分も横になって、トラックと一緒に走るように遊ぶA。支援者はしばらくAの遊びを見守った後、「アンパンマン、のせて」と荷台にアンパンマンのぬいぐるみを入れると、ぬいぐるみをじっと見て、また走らせる。Aが立ち上がった時、支援者が、「これもどうぞ」とトラックにのせるようおもちゃをわたすと、Aはそのおもちゃを手に取り荷台にのせてくれた。そして、また、トラックの横にねころび、遊ぶA。この遊びを楽しんだAは、「お母さん」といいながら母親のもとにかけよった。まるで、母親にトラックでいっぱい遊んだことを伝えにいったようにも思えた。

おやつタイムでは、言葉がたくさん言えるようになったという驚きとAの成長の喜びを母親と支援者で分かち合った。その中で「お母さん」とはっきり言って母親にかけよっていたAの姿に感動したことを伝え、母親から、最近、「お父さん」も言えるようになり、保育園の友人の名前も覚えたという。母親が、Aに、支援者と母親の面接をしていた別の支援者の名前を教えると、「〇〇先生」「△△先生」と指さして名前を言った。

このエピソードにあるように、Aは、支援者の言葉がけを聞いて、自分の意志を言葉で伝えることができた。これまで、Aの「いや」の表現は、支援者が「ちょうだい」と言った時に、手をはらいのけることや逃げるといった行動で表現していたが、この日は「いや」と言葉ではっきり言うことができた。これは、支援者の言葉を理解し、それに応答する言葉として発したものであり、Aの言語的コミュニケーションの力が形成されたことによるものだと考えられる。また、支援者とAの好きな遊びを介して遊んでいる場面では、Aの覚えた言葉（乗り物、食べ物、形、色等の名前）をたくさん発していたが、エピソードにもあるように支援者の言葉がけや支援者のかかわりによって、言葉を発していた。これは、Aが、他者と一緒に遊んでいるということ意識し、その人と楽しい遊びを共有したいという気持ちをもっているからではないかと思われた。また、支援者が、トラックの荷台にぬいぐるみを乗せた行動を見た後に、支援者からの言葉がけと働きかけを理解し、行動した姿からも、他者の意図することを理解できたと思われた。DSM-5-TRにおけるASDの診断基準の中には想像上の遊びを他者と共有することの困難が挙げられているが（American Psychiatric Association, 2013）、Aのこうした行動は、想像上の遊びを他者と共有することの芽生えであり、Aのコミュニケーションや社会性が育まれていることを感じさせるエピソードである。そして、Aは、トラックと一緒に自分も走るという遊びを楽しんだ後、「お母さん」と言って、少し離れた位置にいる母親のところにトラックをもっていた行動は、Aが母親に「楽しいよ」という気持ちを共有したいからではないかと思われる。このエピソードも上述したような、叙述的な共同注意行動であり、それを言語的に表現したものだと考えられる。これも普段の家庭の関わりにおいて、母親がAの要求や欲求を満たす関わりを継続していることが、Aの叙述的な共同注意につながっていると考えられる。

## 5 総合的考察

本研究では、ASDの診断を受けた子どもとその母親を対象に、自閉スペクトラム症幼児を対象とした早期支援プログラムであるAPPLEを実施した結果をもとに、幼児期にある自閉スペクトラム症とその保護者への早期支援のあり方を検討した。1年半にわたって8回のAPPLEのセッションにおけるエピソードをもとにし、APPLEの効果を多角的に考察する。

APPLEの構成要素「Play and social development」では、子どもの好きな遊びによりそいながら、人とのかかわりや社会性を育むためのかかわりを行っていくプログラムである。本プログラムの8回の実践からも、ASD児の発達初期の課題における「人とのかかわり」や「社会性」の発達を促すためには、まず、第一段階として、支援者が子どもの好きな遊びや活動を尊重する姿勢を保持することは基本的なかかわりとなると考えられる。そのために、対象児が好きな遊びや活動に取り組むための物理的環境を整備しておくことが重要であると考えられた。こうした遊びの環境を整備する際は、本プログラムで実施したように、家庭や保育所からの情報をもとにすることで、子どもの興味・関心にあった玩具、得意とする活動を準備することが有効であることが示唆された。さらに、支援者と母親との面談を行っている同じ部屋で、Aとのかかわりを行うという環境がAに安心感を与えることに寄与した点も重要である。このような環境において、Aは自己発揮しやすい状況が提供され、人とのやりとりを生むための意図的な関わりを通じて、他者を意識し、その介入を受け入れる姿勢が確認された。支援者がAの遊びを見守り、応答的な環境を整備することで、信頼感が醸成され、共同注意行動の頻発とそれに伴う言語活動の活発化が見られた。また、「Learning from children」は、支援者が子どもの姿から学び、支援の方法を柔軟に適応させていくことを重視している。本研究においては、母親や共同研究者を含めたチームでAの発達や願いを共有しながら、子どもにとって最適な環境や支援方法を模索する過程が大きな意義を持った。このように、支援者が子どもから学ぶ姿勢を持つことは、子どもの最善の利益を保障するために不可欠である。

次にAの母親への面接を並行して行うことの有効性について考察をする。APPLEでは「Parental support」を構成要素の一つとしてかかげている。本事例において、母親との面接を行った支援者は、以下の3点を意識しながら母親との面接を行った。まず1点目は、Aの社会性の発達の様相について伝えるということである。APPLEの取り組みでは、SCERTSプログラムにおいて用いられるアセスメントであるSAP-Rを用いて、Aの社会性の発達を継続的に捉えている。この継続的な面接によって、Aの現在の社会性の発達について前回の面接との比較から伝えることができる。Aの社会性の発達の変化は母親によって日常的に目の当たりにされているものではあるものの、普段の生活の中では意識することが難しいことでもある。Aの社会性の発達について、支援者からSAP-Rの聴取内容をもとに明示的に伝えられることで、母親はAの社会性の発達をより意識することができたと考えられる。次に2点目として、プログラムの中で見られるAの行動やAとの関わりを行った支援者がAに対して行う働きかけの意味を解説することである。例えば、Aが示した要求の行動は、玩具と母親を同時に注目していなければ成立しない行動であるといった点や、完成したパズルをAが母親に見せに来た行動は、母親と興味や関心を共有したい行動の現れであるといった点について本プログラムでは解説を行った。このようなAの行動に対する解説や支援者の関わりのねらいの説明は、母親の普段のAに対する関わりに対して指針を与えると考えられる。すなわち、Aが普段の生活の中で見せる共同注意をはじめとする他者を意識した行動に対する母親の意識を高めるとともに、母親におけるAの共同注意の成立を促すような関わりを促すと考えられる。最後に3点目は、母親の日常的な関わりに対して肯定的なフィードバックを行うことである。面接の中で、母親が普段の関わりについて語った際に、その関わりが肯定

的なものであると思われた場合には、そのことを積極的に母親に伝えた。このような肯定的なフィードバックは母親の A に対する関わりをエンパワメントすると考えられる。

本研究は、2歳0カ月でASD児の診断を受けたAを対象に、診断直後からAPPLEのプログラムの導入した事例である。APPLEの構成要素である「Early Support」では早期支援を強調しているが、本研究において、ASDの早期支援においては、ASD児の支援と並行して家族への支援が行われることが必要不可欠であることが示唆されたと考える。

## 6 まとめと今後の課題

本研究では、APPLEの実践を通じて、ASD幼児の社会性の発達や人とかかわりの変化に着目して考察を行った。Aの発達は、本プログラム単独の成果ではなく、家庭における母親や父親といった信頼ある大人との受容的なかかわりの積み重ねにもよるものであることが確認された。これを支援者が家族と共有し、共に支援を進めることが本プログラムの意義であるだろう。

幼児期のASD児およびその家族への支援において最も重要なことは、子どもと家族への支援を並行して行い、家庭が子どもの発達の間として機能するよう支えることである。そのためには、支援者がASD児の発達の姿や早期支援のポイントを的確に把握し、家族に分かりやすく伝えることが求められる。同時に、家族が抱える困難を理解し、心情に寄り添った支援を行うことも重要である。

今後の課題としては、APPLEで得られた成果を地域社会や現場で活用するための具体的な方法の検討が挙げられる。特に、児童発達支援センターや保育所、幼稚園などで共有できる教材や研修プログラムの開発が必要である。また、APPLEの長期的な効果を追跡する研究や、異なる背景を持つ家族への支援モデルの開発も課題として残されている。

本研究の成果が、ASD児とその家族への支援の質の向上に寄与し、より多くの家庭が適切な支援を受けられる体制の構築につながるために、今後も研究を継続していきたいと考える。

## 付 記

本研究にご協力いただいたA君とA君のお母様に深く感謝いたします。なお、本研究のデータの一部は、日本乳幼児教育学会第33回大会及び、日本特殊教育学会第62回大会で発表したものです。

## 引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.).
- Bottema - Beutel, K. (2016). Associations between joint attention and language in autism spectrum disorder and typical development: A systematic review and meta - regression analysis. *Autism Research*, 9(10), 1021-1035.
- Dawson, G. (2007). Early behavioral intervention, brain plasticity and the prevention of autism spectrum disorder, *Development and psychopathology*, 20, 775- 803.
- 藤田久美. (2001). 自閉症幼児の保育的セラピー：人とかわる力の形成. 山口短期大学出版会.
- 藤田久美・岡村隆弘・横部紋子. (2021). 発達が気になる子どもと家族への超早期支援プログラムの実証的研究：親子への個別支援の提案と支援者の専門性の構築に向けて. 公益財団法人ユニバーサル財団調査研究報告書：豊かな高齢社会の探求.
- 藤田久美・井辺和杜・永瀬 開・横山順一. (2023). 発達初期の自閉スペクトラム症の子どもと親を対象

- とした早期支援プログラムの APPLE の開発 . 現代保育問題研究会 (編)「現代保育の理論と実践Ⅱ (現代保育内容研究シリーズ) . 第 5 章 , 93-106.
- 浜田 恵 . (2018). 発達障害の早期発見から支援への新たな可能性 : 自閉症スペクトラムの早期支援としての JASPER プログラム . 小児保健研究 , 77(6), 513-516.
- Inada, N., Koyama, T., Inokuchi, E., Kuroda, M., & Kamio, Y. (2011). Reliability and validity of the Japanese version of the Modified Checklist for autism in toddlers (M-CHAT). *Research in Autism Spectrum Disorders*, 5(1), 330-336.
- Kasari, C., Freeman, S., & Paparella, T. (2006). Joint attention and symbolic play in young children with autism: A randomized controlled intervention study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 47(6), 611-620.
- 菊池哲平・古賀精治 (2001). 自閉症児者における表情の表出と他者と自己の表情の理解 . 特殊教育学会 , 39(2), 21-29
- 松田紗代・諏訪利明・小田桐早苗・下田 茜 . (2018). ASD リスクがある幼児の家族への支援 : TEACCH の FITT プログラムを参考に . 川崎医療福祉学会誌 , 30, 61-72.
- 三宅和夫 (監) (1991). KIDS (キッズ) 乳幼児発達スケール , 発達科学教育センター
- Prizant, B. M., Wetherby, A. M., Rubin, E., & Laurent, A. C. (2003). The SCERTS model: A transactional, family-centered approach to enhancing communication and socioemotional abilities of children with autism spectrum disorder. *Infants & Young Children*, 16(4), 296-316.
- Robins, D. L., Fein, D., Barton, M. L., & Green, J. A. (2001). The Modified Checklist for Autism in Toddlers: an initial study investigating the early detection of autism and pervasive developmental disorders. *Journal of autism and developmental disorders*, 31, 131-144.
- 横山佳奈・吉田翔子・永田雅子 . (2019). 自閉スペクトラム症児への早期介入における現状と展望 . 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 , 66, 7-16
- Waddington, H., Reynolds, J. E., Macaskill, E., Curtis, S., Taylor, L. J., & Whitehouse, A. J. (2021). The effects of JASPER intervention for children with autism spectrum disorder: A systematic review. *Autism*, 25(8), 2370-2385.

## **Support for Children with Autism Spectrum Disorders and Their Families in Early Childhood: Based on the Practice of the APPLE Program**

### Abstract

In recent years, early support for preschool children with autism spectrum disorder (ASD) has been the focus of social attention. In this study, we report the results of an early support program, APPLE, for one preschooler with ASD. As a result of the implementation of this program, it was confirmed that the joint attention behavior and verbal behavior of the child who participated in the program became richer. In the future, it is necessary to verify the effectiveness of the APPLE program by increasing the number of children participated in this program.